

講座「丹波学」

平成22年度

みち

から見た丹波の歴史
～京都丹波とともに学ぶ～



(財)兵庫丹波の森協会

丹波の森公苑

目 次

1	講座「丹波学」の開講にあたって	…………… 1
2	講座内容	
	(1) 伊能忠敬が測量した丹波の道	…………… 3
	(2) 南北朝時代の丹波 ～足利尊氏の動向を中心に～	…………… 11
	(3) 古道と信仰の道をゆく	…………… 17
	(4) 丹波に延びる鉄路	…………… 22
	(5) 丹波再発見総括シンポジウム	…………… 29
	(6) 京都丹波の史跡巡り	…………… 32
3	講師プロフィール	…………… 34
4	編集後記	…………… 36

1 講座「丹波学」の開講にあたって

1 丹波の森構想（丹波の森づくり）

兵庫県丹波地域は、県の中東部に位置する森の国です。篠山市と丹波市からなり、阪神大都市圏から50～70kmの近郊にありながら、森林面積が約75%を占め、豊かな自然や田園景観が残され、心のふるさとというべき大きな価値を持つ地域です。また、播磨、京都、大阪、日本海側からの街道が交差し、加古川、武庫川、そして、由良川の源流をなすことから様々な文化が入り交ざり、まさに文化の十字路として独特の文化を育んできました。

近年の社会情勢の変化はこの豊かな丹波の姿を急速に変えてきました。同時にそこに住む人々の心にも大きな変化を与えてきました。

こうした急激な社会変化に直面した現在こそ、新しい時代に向けて積極的に丹波の環境創造を進める丹波人の育成が必要になってきています。

このような状況で、かけがえのない美しい自然空間や、人々の営み、生活空間、生活文化、地域内外の人々の交流などを含め、「丹波の森づくり」に丹波をあげて取り組んでいます。この「丹波の森づくり」のベースになっているのが、人と自然と文化の調和した地域づくりを目指す「丹波の森宣言」です。

2 講座「丹波学」の開設

丹波の森公苑は、丹波の森づくりの拠点であるとともに、生活創造活動に必要な基本的な考えを提供し、共に考え実践する場を創造するところでもあります。

講座「丹波学」は「丹波の森宣言」の中で提起された「丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育

てます。」という提言を主題として平成8

本講座は、単なる郷土史等の講座ではなく、丹波地域の伝統、文化、歴史、風俗、人物、地理、言語などを総合的に研究する地域づくりを目指す地域学です。

3 平成22年度のテーマ

今回のテーマは、『みち』から見た丹波の歴史～京都丹波とともに学ぶ～です。

京都府の丹波にも目を向け、近世まで京都府の桑田・船井・何鹿・天田と兵庫県の多紀・氷上の6郡で構成されていた丹波国を『みち』という新しい切り口で見つめていきました。第1回・第3回は、兵庫の丹波地域の道について学び、第2回・第4回の講座では京都丹波から講師を招聘。さらに、第5回目の講座では京都府亀岡市を訪ね、シンポジウムを通して、地域文化を切り口にした今後の京都丹波との連携のあり方について学びました。

丹波の森宣言

丹波の自然と文化は、現在及び将来にわたる住民共有の財産であって、これを維持発展させることは私たちに課せられた重大な責務です。

今、私たちはこの責務を強く自覚し、お互いに力を合わせ、自然や文化を大切にしながら、これらを生かした「丹波の森」づくりを次のように進めることを宣言します。

- 1 丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます。
- 2 丹波の自然景観を大切にし、花と緑の美しい地域づくりを進めます。
- 3 丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。
- 4 丹波の素朴さと人情を大切にし、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます。

4 講座内容

- テーマ 『みち』から見た丹波の歴史 ～京都丹波とともに学ぶ～
- 期間 平成22年10月9日(土)～平成23年3月13日(日)
- 場所 丹波の森公苑 多目的ルーム・ギャラリーかめおか(京都府亀岡市)
- 日程

開催日	時間	学習テーマ	会場
10月9日 (土)	14:00	開講式・オリエンテーション	多目的ルーム
	14:00～ 16:00	伊能忠敬が測量した丹波の道 郷土史家・伊能忠敬研究会会員 横川淳一郎氏	多目的ルーム
11月27日 (土)	14:00～ 16:00	南北朝時代の丹波 ～足利尊氏の動向を中心に～ 亀岡市文化資料館長 黒川孝宏氏	多目的ルーム
平成23年 1月15日 (土)	14:00～ 16:00	古道と信仰の道を行く 民俗芸能学会評議員 久下隆史氏	多目的ルーム
2月19日 (土)	14:00～ 16:00	丹波に延びる鉄路 南丹市立文化博物館学芸員 井尻智道氏	多目的ルーム
3月13日 (日)	8:30～ 17:30	丹波再発見総括シンポジウムと京都丹波の史跡巡り 京都府立大学生命環境学部教授 宗田好史氏 民俗芸能学会評議員 久下隆史氏 京都大学東南アジア研究所准教授 安藤和雄氏 京都造形芸術大学環境デザイン学科准教授 下村泰史氏 大阪商業大学経済学部准教授 原田禎夫氏 亀岡市文化資料館長 黒川孝宏氏	ギャラリーかめおか (京都府亀岡市)



2 講座内容

(1) 伊能忠敬が測量した丹波の道

郷土史家・伊能忠敬研究会会員

横川淳一郎

はじめに

伊能忠敬という名を知ったのは、小学校6年の時(昭和13年)修身の時間であった。彼は日本を歩いて地図を作った偉い人、百年も前の千葉県の人、遠い所の人だと思った。昭和30年頃、父が『新井村誌』の編集委員をしていた。夜帰って来て「伊能忠敬が下の街道を測量して通ったん知つとるか」と言った。遠い昔の人が、急に身近に感じ調べたいと思ったが、その手懸りはなかった。

昭和61年井上ひさし著『四千万歩の男』という本が出た。その中で「伊能忠敬記念館」を知り、『測量日記』で氷上・多紀の所をコピーしてくれるよう手紙を出した。

時の館長、佐久間達夫氏は、『測量日記』は重要文化財だからコピーは出来ない。」との返事で手書きで書き写して送ってもらった。それに感激し調べることにした。

1 忠敬の幼少時代から隠居まで

千葉県小関村に生まれ、名は小関三治郎といった。上に兄と姉がいた。6歳で母をなくす。当時千葉では長子相続で母の弟が家を継ぐことになり、父は養子で兄と姉を連れて実家に帰り、三治郎は小関

家に残された。

三治郎は10歳になり父に引き取られ、有能な青年に成長する。伊能家では21歳の未亡人ミチが婿を求めていた。名を忠敬と改め養子となる。

伊能家は当時酒造家で、年に1,400石作る程であり、他に運送業、江戸で薪問屋を営んでいた。

後に地頭・名主・村役後見となり、天明の大凶作には関西から大量の米を買い付け、窮民を助け江戸で売り払い利益を得た。

2 隠居して高橋至時の弟子に

幕府天文方の至時の弟子などとてもなれないが、よいつてで弟子になれた。

天文学・暦学を学ぼうちに、日食・月食の始まり終わりの時刻が違い、暦の信用を落とす結果になっていた。

当時地球の大きさが正確に分かっていなかった。緯度一度の長さを実測した者もなかった。

そこで忠敬は、浅草の暦局から深川の自宅まで測って1分の長さを調べようと考えた。

当時江戸の町中を間尺で測ることは出来なかったので歩測し、磁石も怪しまれるのでそでなどで隠し、南北に修正して1,631メートルと出し、至時に知らせた。

「距離が短く誤差が大きくて駄目だ、蝦夷まで測れば正確な数が出るだろう。」と、それを聞いて「やらせて下さい。」と忠敬が申し出、至時等が幕府に働きかけ、寛政12年4月19日(新6月11日)出発となった。

3 全国測量

第1次 奥州街道・蝦夷南岸測量

歩測1歩69センチメートル、内弟子三人従者二人

第2次 本州東海岸

(歩測でなく間縄で測る)

第3次 奥州西半分(鉄鎖で測る)

緯度一度の距離28.2里(110.75キロメートル)誤差は殆どない。

第4次 東海地方沿岸・北陸沿岸測量

これ迄の地図を江戸城で発表した。

第5次 東海道筋・近畿・中国沿岸測量

幕吏となり以後幕府の事業として測る。

第6次 四国・大和路測量

第7次 九州第一次帰り多紀の今田測量

第8次 九州第二次帰り氷上・多紀測量

第9次 伊豆七島・江戸府内測量

4 丹波測量についての調べ方

一 忠敬に関する古文書・書籍を集めること。

二 『測量日記』を参考にして、江戸末期頃の道はどこか古老や有識者に尋ねて歩く、この二つであると考えた。

○氷上の古文書・書籍

ア 青垣生田家文書『測量御役人御通行帳』

イ 柏原鴨野村方文書『お花講の記録』

ウ 柏原八幡神社文書『院主と忠敬の

問答』

エ 柏原下小倉村方文書(書上控)

オ 市島山名家文書(小堀中務手代の行動記録)

カ 青垣寺内村方文書(かかった費用)

キ 『鶴牧藩日記』(和田代官所の記録)

ク 『丹波の古道』奥谷高史著

○多紀の古文書・書籍

ア 大山園田家文書(十一冊)

イ 大山中中沢家文書(書上控)

ウ 今田木津村方文書(書上控他)

エ 『篠山藩日記』

5 測量方が来る前、住民に通達や準備

京都奉行から文化八年十二月丹波一円に通達

- ・測量の前後は通行まかりならぬ。
- ・鉄砲の儀は通行の日に限り堅く停止。
- ・牛馬は差戻すか、う回させよ。
- ・女、子どもの見物は相ならぬ。
- ・道の水たまりや橋は修理をせよ。
- ・測量方が通られる時は田に出ぬこと。

どの本陣も準備に抜かりなくやったと思うが、追入本陣の記録があるので書き上げる。

御幕・御立提灯・砂盛・風呂桶・木地三方・塗三方・刀掛・手たらい・傘・下駄・毛せん・飾り手桶・机・ろうそく・給仕人十二人・宿手伝掃除夫共十二・三人。人足百三十(ぼん天持 才覚成者選立)出迎誰々、服装は・・・、手札の書き方指導等々。

6 測量方法と道具

ア 道線法

(ぼん天・間縄・鉄鎖・磁石)

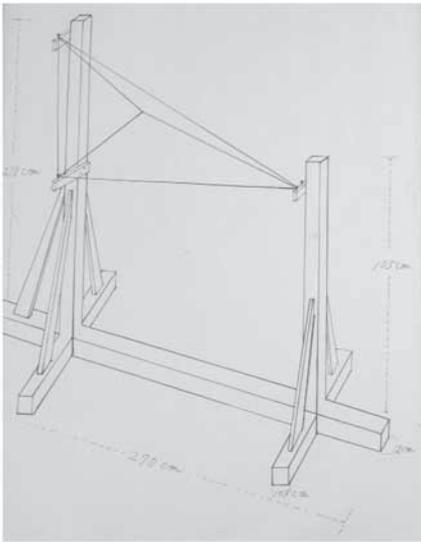
イ 交会法 (半円方位盤)

ウ 横切法

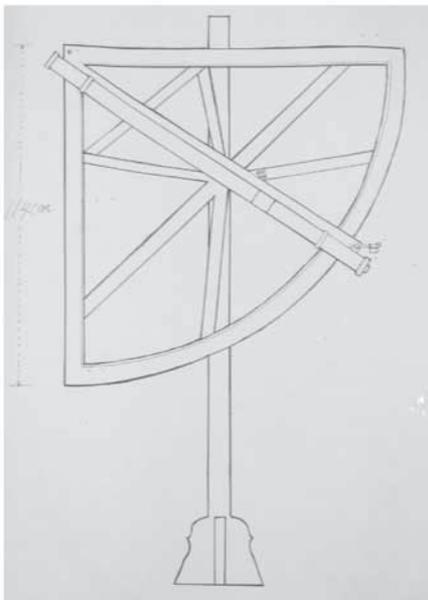
エ 星測 (中象限儀・子午線儀)

昔からあった。測量方法で、丁寧に行った。

7 測量の道具



子午線儀



中象限儀

8 『測量日記』に出ている村の名

文化11年第8次九州測量の帰り

氷上郡

正月八日 播州国界小野尻峠—小野尻—
小林—和田着 (一は実測、…は無測)

九日 和田出立—北和田—草部—朝坂—
佐野—稲畑—鴨野—大新屋—拳田—柏原
着

十日 柏原出立—多田—石負—横田—氷
間下—市部—氷上—南油良—棧敷—絹山
—香良—伊佐口枝方町着 (図Aを参照)

十一日 方町出立—日比字—御油 (円通
寺)—沼—東芦田 (高座神社)—栗住野
— (芦井神社)—西芦田—佐治 (八柱神
社) 本陣着 (図Bを参照)

十二日 佐治出立—市原—杉谷—中佐治
—山垣—徳畑—和田—遠阪着

十三日 遠阪出立—遠阪峠但馬国界

正月二十九日 郡界塩津峠—下竹田—中
竹田—大森着

晦日 大森出立—上竹田—岡本—上垣—
上田—梶原—小多利—大多利 (阿陀岡神
社)—野上野—国料着 (図Cを参照)

二月朔日 国料出立…東中…佐中峠—
東中—国料—奥長谷—追入峠…奥長
谷…國領…野上野…小多利着

二日 小多利出立…大多利—多田—黒
井 (兵主神社)—平松—朝日—石細—歌
道谷—坂—北野—石生…柏原着

三日 柏原出立—本町 (柏原八幡神社)
— 石田—新町—見長—下小倉—上小倉
(刈野神社) — 金ヶ坂峠

多紀郡

郡界—追入—国料峠…追入本陣着
四日 追入出立—大山上（神田神社）—
大山新—北野新田—北野—大山下—古佐
— 味間—大沢…北野新田着
五日 北野新田出立—木之部—宮田—板
井—小坂—佐仲峠…宮田—西谷—大
野—有居—西岡屋—西町—魚屋町—二
階町着
（図Dを参照）

六日 篠山二階町出立—東岡屋—東吹—
宇土—杉—大沢—犬飼—矢代—波賀野—
見内—古市着
七日 古市出立—不来坂—小野原—今田
—市原—（清水寺）…市原着
（図Eを参照）

八日 市原出立…古市—油井—草野—
日出坂—摂津国有馬郡を測る
十一日 篠山二階町出立—呉服町—立町
— 河原町—京口門—池上—八上—西荘
—西堂—日置（五十宮八幡宮）—上宿
—井上—宮前—小中—辻—小野新—福住
着
十二日 福住出立—川原—安口—西野々
— 岩坂峠（郡界）（図Fを参照）

文化8年第7次九州測量の帰り
三月八日 多紀郡今田村木津—釜屋—三
ツ峠国界（図Eを参照）

9 測量にかかった費用

大掛かりの測量の費用は、どうなっ
ているのか知りたかった。数年前寺内村方
文書コピーが手に入った。解読すると次

のようになる。

文化11年（1814年）正月
幕府からの指図で天文方一行がお通りにな
り、氷上郡内御泊まり九カ所、御昼休
み八カ所、村々より人夫伝馬滞りなく差
出し、諸費用を計算し
即銀高 〆12貫665匁（約211両）
氷上郡の米高 〆62175石5斗
千石につき銀203匁7分の割
札209匁8分の割

寺内は札で98匁2分3厘払った。
札は柏原藩札で米1,000石につき銀よ
り、6匁1分多く払わなければならなかつ
た。
江戸時代は大体物価が安定していて、銀
60匁=金1両=文4貫文=米1石であつ
た。

氷上郡は大名、旗本33家あり、柏原藩
の高は全体の23%しかなく、測量費用を
大名・旗本から出すことは出来ず、農民
が出すことになった。

篠山藩は全体の記録はないが、大山村
は二泊二休息で950匁（15.8両）、今田村
は休息1回で210匁（3.5両）で、藩から
費用を出している。

10 おわりに

幕末頃の道は三尺道といわれていた。
といっても山すそや峠道で、村や町の中
の道幅はもっと広がったと思われる。

昔の平地は米を作る所といわれ、平地
を通る道は少なかつたと古老の話である。

ところが氷上や多紀では、千年も前か
ら条里制が整備されていたので、条の道、
里の道があり、又あぜ代道も人が利用す
れば広い道になったのである。

現在県道柏原一稲畑線は、忠敬が測量して通った道で、条里制のあぜ代道である。

又氷上町の横田から市辺まで条里制の道ではないが、16町の直線道路である。これは慶長の頃領主別所長治が改修したという記録がある。

この道も忠敬が測量して通った。

全国の沿岸測量に比べれば、丹波の道は測量し易かったであろう。

【参考文献】

『伊能忠敬の科学的業績』保柳睦美編著
古今書院

『伊能忠敬測量日記』佐久間達夫校訂
大空社

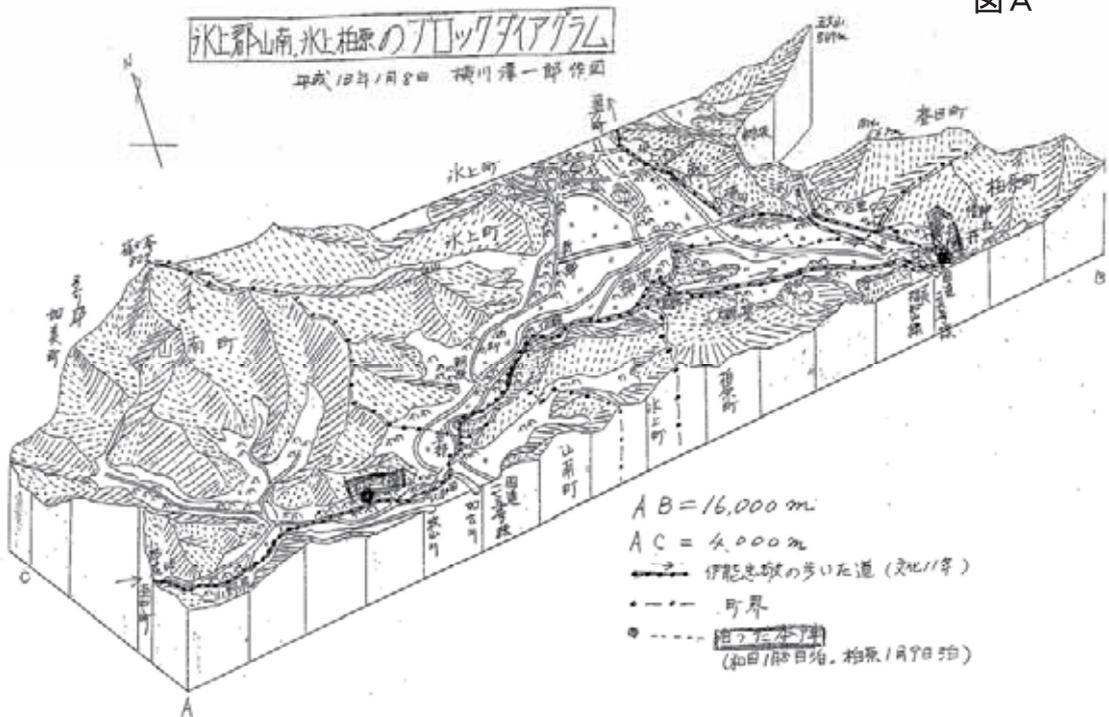
『伊能忠敬の地図をよむ』渡辺一郎著
河出書房新社

『伊能忠敬測量隊』渡辺一郎著 小学館

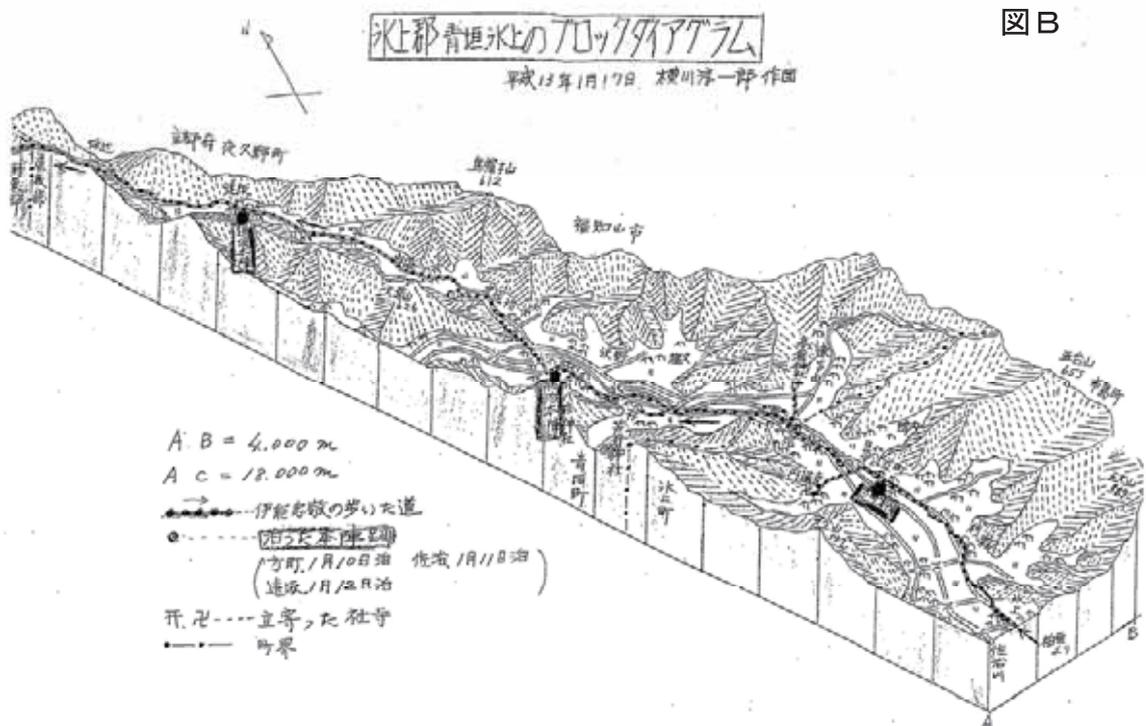
『伊能忠敬』小島一仁著 三省堂

『忠敬と伊能図』伊能忠敬研究会編
(株)アワ・プランニング

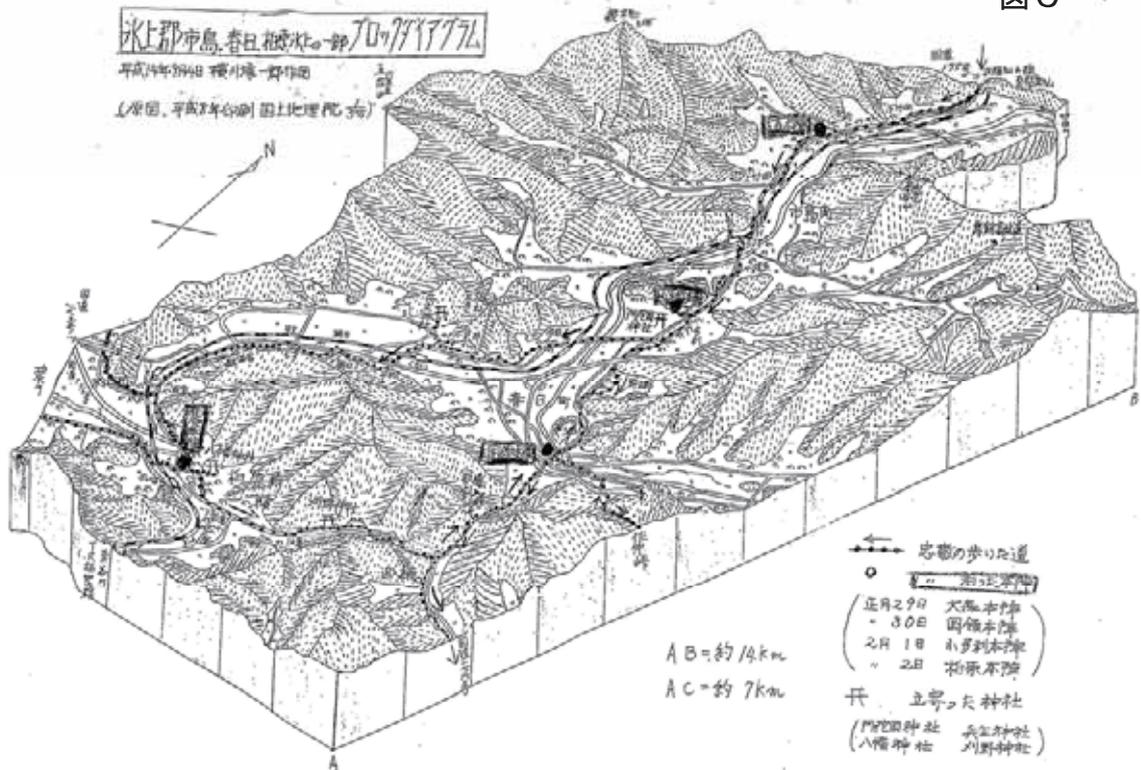
図A



図B



図C



図D

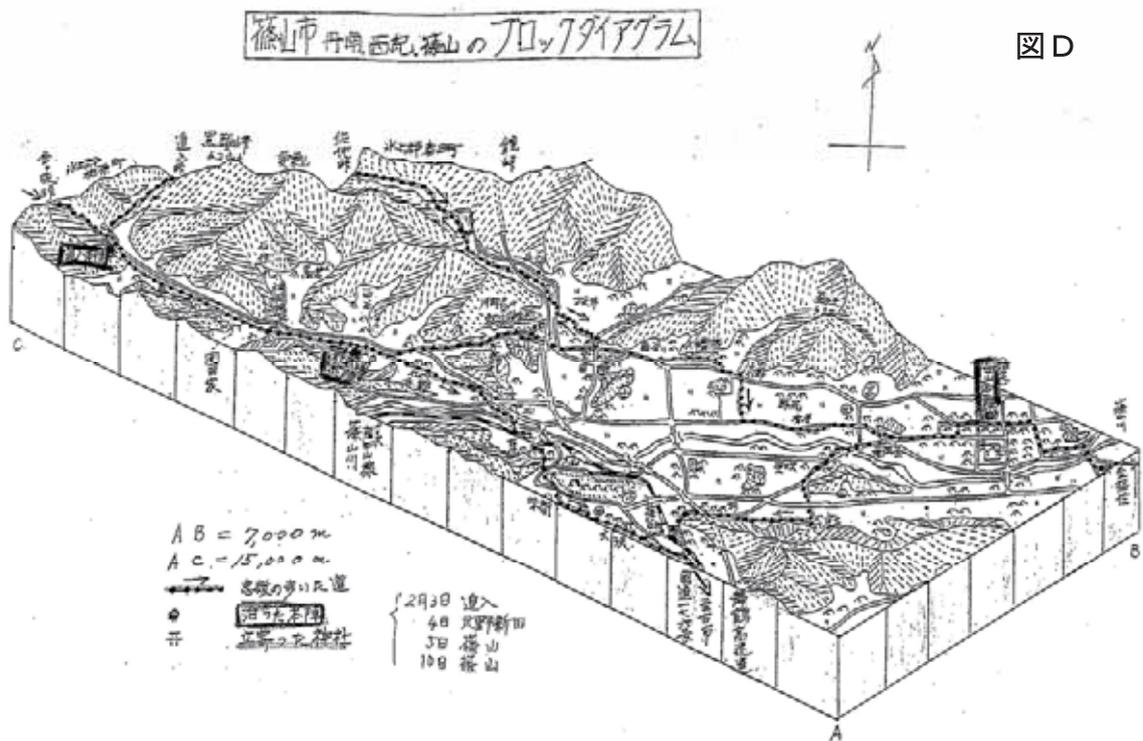


図 E

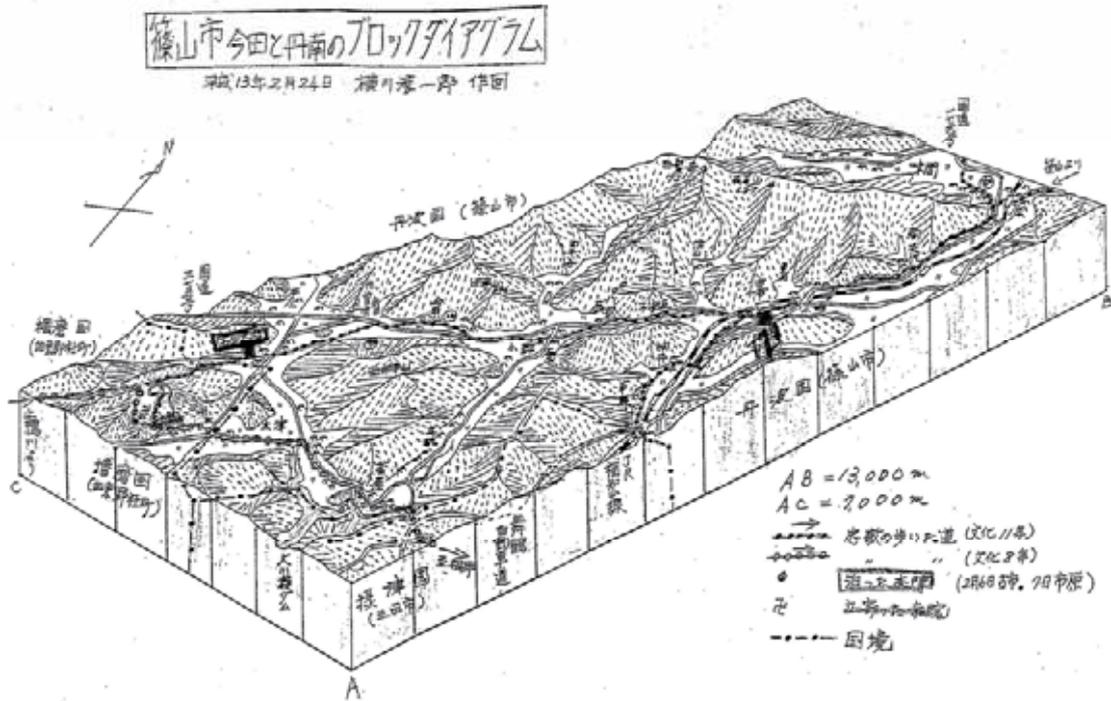
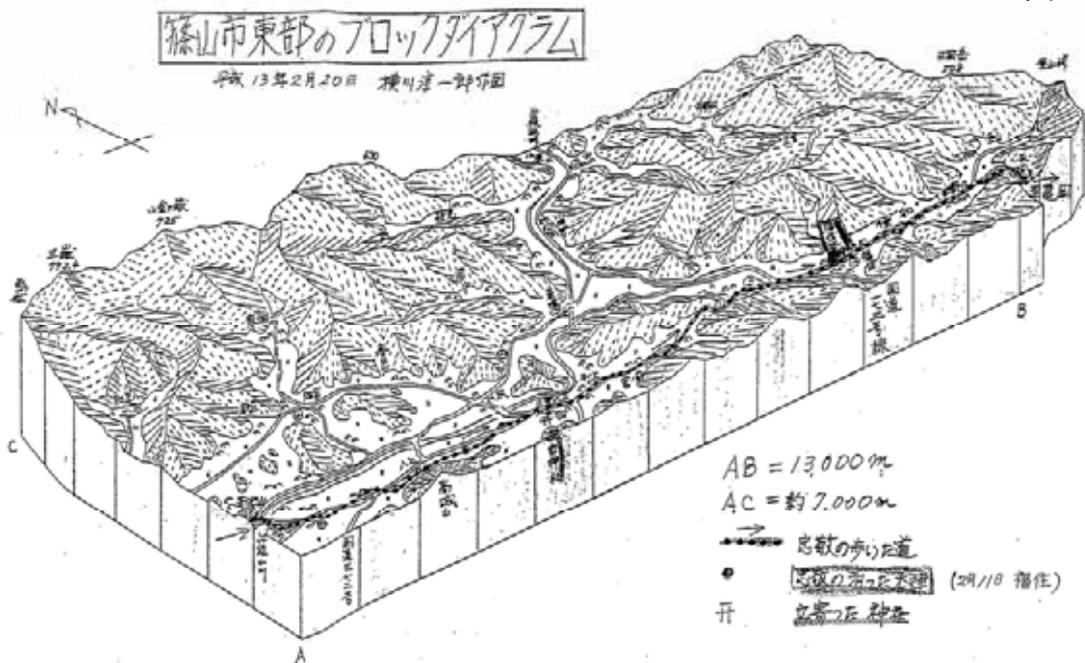


図 F





(2) 南北朝時代の丹波

～足利尊氏の動向を中心に～

亀岡市文化資料館長 黒川孝宏

はじめに

南北朝時代は、後醍醐天皇の南朝と足利尊氏の北朝とが全国的な規模で対立した時代で、その過程で尊氏は、武士勢力の中心的な指導者としての重責を果たし、室町幕府を創設し初代将軍となる。

ここ丹波の地においても、京都に近いという地理的条件から、南朝に属する者と北朝を支持する勢力とが錯綜し、複雑な政治・軍事的な混乱が繰り返される。

今回、足利尊氏の動向について、丹波を中心に眺め、南北朝時代における尊氏と丹波との関係を「みち」をキーワードとして考えてみたい。

1 後醍醐天皇による倒幕計画

源頼朝によって創設された鎌倉幕府の将軍は、頼家・実朝の3代で断絶し、4代目以後は藤原摂関家や皇族から迎えた。そのため、代々執権の地位についた北条氏一族が実権を掌握することとなる。北条時頼以後は、北条氏の中でも惣領家にあたる得宗家が政治を独専化していく。

一方、大覚寺統から即位した後醍醐天皇は公家勢力を結集し、正中元年(1324)9月の正中の変、元弘元年(1331)5月の元弘の乱と2度にわたり倒幕を計画する。いずれも失敗に終わり近臣が処刑され、

天皇自身も隠岐島(島根県)へ流されるが、こうした動向は倒幕の気運を促進する契機となった。

元弘3年(1333)閏2月2日、天皇は隠岐島を脱出し、伯耆国船上山(現鳥取県赤碕町)に拠り、全国の武士に倒幕の綸旨を發した。楠木正成を中心に畿内の新興武士勢力が呼応し、北条氏打倒へ一気に進んでいく。天皇の反北条・倒幕を呼びかける綸旨は、全国に發せられ各地での挙兵が相次いだ。

2 足利高氏の挙兵

京都から丹波路を越えて篠村八幡宮(現亀岡市)へひとりの若武者の行軍が次第に近づいて来る。彼の名は足利高氏。数えて29歳の大将に統率された軍勢5千騎余りである。

高氏は足利貞氏の2男として生れるが、嫡男高義の早世で足利氏の家督を継いでいた。

母は上杉頼重の娘清子。清子の実家上杉氏は元は藤原氏一流の勧修寺氏を称したが、鎌倉に下り、後に武士となり丹波国上杉荘(現綾部市)を与えられ、上杉氏を名乗った。上杉荘は清子の郷里であり、高氏にとっては出生地の可能性もある。高氏と「丹波」との大きな接点のひ

とつである。

元弘3年(1333)3月、高氏は幕命に従い伯耆国船上山に籠った後醍醐天皇の討伐のため、名越高家とともに鎌倉を発して京都へ向かった。京都での軍議の結果、高氏は搦手(後方からの攻撃)の大將として山陰道を、高家は大手(正面からの攻撃)の大將として山陽道をそれぞれ伯耆へ進軍することが決定された。4月27日、両軍は京都を出発。高家は鳥羽から久我岨へ軍を進めるが、赤松則村との一戦であえなく敗死した。一方、高氏は高家の討死にもかかわらず、丹波路を進み、篠村に着陣した。

丹波入りと同時に高氏は、全国の有力量士へ軍勢催促状を発する。軍事的には、絶対に失敗は許されない状況で、高氏が篠村八幡宮を決起場所として選んだ背景には、高氏なりの冷静な判断があった。

第1に、丹波国篠村八幡宮は京都に近く軍勢を結集しやすい場所であった。再度京都の北条氏の拠点六波羅探題を攻めるのに軍事的、地理的に都合がよかった。『太平記』に「丹波路を指して」などと度々記載されている点からもうかがえる。

第2に、前述したように高氏の母の実家である上杉荘は、同じ丹波の綾部郷であり、鎌倉時代末期には足利氏の領地も所在し、ゆかり深い一族が多くいた。一騎でも多くの軍勢を結集することが不可欠であるため、地元の丹波の武士たちへの期待も大きかったと考えられる。

第3に、八幡神は、源氏の氏神であるとともに、源義家以来、足利氏には守護神でもあった。その社前での決起は精神的な支えと結束に通じる。

4月29日、高氏は篠村八幡宮の社前で源朝臣高氏と署名した源氏再興の「足利高氏願文」を捧げ、天皇方へ寝返って北条氏打倒の反旗を翻した。鎮守の森の一角、楊の木に源氏の白旗が風にたなびいたのである。ここ丹波の篠村八幡宮の地から源氏再興と室町幕府の初代将軍への第一歩が踏み出された。

同宮での挙兵以降、高氏のもとに多くの武士が参集した『太平記』には「其外久下・長沢・志宇知・山内・葦田・余田・酒井・波賀野・小山・波々伯部其外近国ノ者共、一人モ残ラズ馳参リケル」とありその数は2万騎を越えという。1番乗りをした久下弥三郎時重の家紋を見た高氏は、時重の先祖が、かつて、石橋山の合戦で敗走した源頼朝を一番に救援した功績から、「一番の文字を家紋として許された」という由来を聞いて「当家の吉例」だと大いに喜んだと記されている。

5月7日に至り集結した武士を従えて天皇方の赤松則村・千種忠顕らとともに京都に攻め込み、幕府の拠点である六波羅探題を壊滅する。高氏はただちに京都に奉行所を設置し、自己勢力の確保に努めている。

高氏は、まさに時と場所と人を得て一気の「決断」を下し「挙兵」を断行したが、「丹波の地」において決行するという大前提があったと考えられる。

3 南北朝時代の丹波の武士たち

(兵庫県丹波)

兵庫県の丹波地域にも、鎌倉時代末期から南北朝時代に活躍した武士たちが大勢いた。

1 番乗りをした久下氏は、武蔵国大里郡久下郷（現埼玉県熊谷市）の武士で、武蔵七党の一つ私市党に属していた。承久の乱後に、栗作郷（現丹波市）に地頭職を得て丹波に移住した。長沢（中沢）氏も、武蔵国那珂郡中沢郷（現埼玉県児玉郡内）の出で、久下氏と同じように承久の乱後、東寺領の大山荘（現丹波市）に地頭職を得て丹波に進出した。葦田氏は氷上郡蘆田（現丹波市）に、余田氏は氷上郡余田（現丹波市）に居した武士。酒井氏は多紀郡酒井荘（現丹波市）の武士。波賀野氏も同郷波賀野（現丹波市）の武士。小山氏は多紀郡大山の武士と推定され、波々伯部氏は多紀郡祇園社領波々伯部保（現篠山市）の武士であった。

さらに、後に丹波守護代として活躍する荻野朝忠は、平姓を名乗り梶原氏と同祖であり、もとは相模国愛甲郡荻野の出でと推定されている。足利高氏の挙兵に際しては「今さら人の下風に立つべきにあらず」といって参集せず、丹波から若狭を経て、六波羅探題をめざして攻め上ったという（『太平記』）。朝忠に従軍した足立氏は氷上郡佐治荘（現丹波市）の武士で、もとは武蔵国足立郡の出で、鎌倉時代末に佐治荘を賜り居したという。本庄氏は氷上郡葛野荘本庄（現丹波市）の武士と推定されている。

篠村八幡宮での挙兵から、政治の表舞台に登場した高氏。以後の軍事的行動には、こうした「丹波の武士たち」の存在と支援が不可欠の要素となる。

4 建武新政から南北朝動乱へ

後醍醐天皇により 1334 年が建武と改元

され、天皇親政の絶対性を誇示するための諸国諸荘園検注計画・大内裏造営計画・官銭発行計画などが次々に発表された。当然ながら、公家や寺院に厚く武士に薄いという政治姿勢のため、足利尊氏などの武士層との対立が激化、建武新政に対する大きな失望は、有名な「二条河原落書」にも見られ、新政権は短期間の内に崩壊する。なお、この時期に天皇の諱「尊治」の一字「尊」を与えられ、「高氏」から「尊氏」に改めている。

天皇と尊氏との政治的対立が頂点に達するのは、建武 2 年（1335）7 月、北条高時の遺子時行が鎌倉を攻めた中先代の乱の時、尊氏は、乱の鎮圧を名目に東下して乱を平定し、そのまま鎌倉にとどまり、天皇の帰京命令に従わず、独自に論功行賞を行い、建武政権との対決姿勢を明確にした。

同年 11 月、新田義貞討伐を名目に建武政権への反旗を掲げ、天皇が派遣した義貞らの尊氏・直義追討軍を箱根・竹下で破り、その勢いで翌建武 3 [延元元] 年（1336）正月に京都へ進軍し、天皇を比叡山に追放する。

ところが、尊氏は奥州から上洛した北畠顕家などの反撃に、京都からの退却を余儀なくされ、この時に、迷わずに丹波路を経て篠村八幡宮に逃れ、播磨を経て兵庫から九州に下向している点を強調しておきたい。敗走にもかかわらず、周到に陣容を再編成し、九州の多々良浜（現福岡市東区）で菊地武敏の大軍を破り再び京都をめざし東上する。5 月に湊川（現神戸市付近）の合戦で楠木正成を撃破し、6 月には光厳上皇を奉じて京都に入った。

8月に尊氏は光厳上皇の弟光明天皇を擁立する。さらに、後醍醐天皇へ講和を申し入れ、天皇は10月に至り逃れていた比叡山から帰京し、花山院に軟禁された。11月には光明天皇へ神器が伝授され、形式的にも実質的にも尊氏の政権の正統性が確立される。同月7日には建武式目が制定され室町幕府が成立する。

一方、花山院に軟禁されていた後醍醐天皇は12月に吉野への脱出に成功し、これ以降、京都を拠点とする室町幕府・北朝と、吉野に行宮を構えた後醍醐天皇・南朝とに分裂した。この抗争が全国的な規模での動乱に拡大する。

5 幕府内部の対立・観応の擾乱の展開

室町幕府初期の政治体制は、足利尊氏（軍事的権限）と弟の直義（行政・司法的権限）の二頭体制であった。尊氏の執事である恩賞方長官の高師直・侍所長官の高師泰兄弟らは、その所領安堵権・軍事指揮権を駆使して新興武士勢力の支持を集め、直義は従来からの慣例を重んじる政治思想で、旧鎌倉幕府時代からの武士勢力を結集していた。高兄弟と直義の幕政をめぐる主導権争いは、ついには尊氏をも巻き込み、尊氏と直義との抗争へと深刻化し、後に「観応の擾乱」と呼ばれる。紙幅の都合でその詳細は割愛するが、幕府内部の対立が南朝方の京都奪還に通じ、幕府成立後の危機的状況を招く。

観応元〔正平5〕年（1350）6月、尊氏方の師直は、直義の養子で長門探題であった足利直冬を攻め九州へ追いやるが、直冬は短期間で九州を従え、依然その勢力を保持する。同年10月、直冬の討伐の

ため尊氏自らが西下するが、その直前に直義が京都から大和へ逃れ南朝方に帰服してしまう。

観応2〔正平6〕年（1351）正月、桃井直常が京都に攻め込み、尊氏・義詮軍は惨敗する。尊氏は、ここでも迷わずに丹波路を経て再び篠村八幡宮に逃れている。南朝方が京都を一時奪回する事態となるが、尊氏は反撃態勢を整え、2月に入り直義と和解する。

しかし、高兄弟殺害事件により両者の間には大きなしこりが残った。観応3〔正平7〕年（1352）2月に至り、直義を毒殺することで「観応の擾乱」が終結する。幕府を支えあってきた兄弟の悲劇であった。

6 足利尊氏と丹波・丹波路

前述したように、足利尊氏には、京都で軍事的な危機状況が2回あった。建武3〔延元元〕年（1336）正月と観応2〔正平6〕年（1351）正月である。

前者は室町幕府成立期において、室町幕府創立まで一気に進めたものの、後醍醐天皇方の反撃により敗走した時である。尊氏は無理をせず体制を整えることに専念し、見事に短期間で京都へ戻り、幕府の基盤を万全なものにした。

後者は室町幕府内部抗争の中で、南朝方の京都への進軍により大敗した時である。幕府内部の混乱に乗じての南朝方の軍事行動であった。この時、尊氏は氷上郡栗作郷の久下氏を頼り、義詮を隣の同郡井原荘の石龕寺に留め、自らは播磨へ向かっている。荻野朝忠がいち早く駆けつけ、多紀郡の波々伯部為光、長（中）

沢佐綱らと共に義詮を守った。(『太平記』)
きわめて勇敢で決断力の優れた尊氏が、常に丹波にその活路を求めたのは、単なる偶然ではないと思われる。

母清子の郷里で出生地かもしれない「丹波の地」。鎌倉時代末期の丹波には、八田郷、漢部郷（現綾部市）などに足利氏の領地があり、尊氏に従う数多くの「丹波の武士たち」。丹波は京都に隣接し、軍事的、交通的にも重要な場所でありながら、その地形は小盆地が点在し、その間に山々が入り込んでおり、地理的に、初めての者にとって不案内の場所であり、慣れている者にとっては絶好の避難場所であった。「丹波路」や「唐櫃越」といわれる「みち」。中でも「唐櫃越」は京都への出入り「みち」として利用された尾根道で、軍道としては安全な道であった。2回も丹波へ逃れたのも、尊氏や従う丹波の武士たちが、そのような「みち」「道筋」を熟知していたためだと考えられる。

尊氏は、源氏の流れをくむ足利氏一門の棟梁としての責任を担いつつ、あらたなる時代の改革実践者として、武士勢力の期待と支持を集めながら、北条氏打倒の挙兵、後醍醐天皇による建武新政への参加と離反、北朝擁立と室町幕府創設、初代将軍就任と次々に時代を切り開いて行った。しかし、その過程で、弟直義との亀裂、実子直冬との争いという悲劇を体験している。尊氏の人生は、動乱にはじまり、動乱を生き抜き、動乱の中で終えたといっても過言ではないが、尊氏の双肩にかかった責任・期待・支持は、まさしく時代の要請でもあったといえる。

そうした尊氏にとって、「丹波の地」「丹

波の武士たち」「丹波路」が果たした役割は、決して過少ではなく、大きなものがあったといっても過言ではない。

7 尊氏の人となり

尊氏の人物像については、『梅松論』（下巻）に記載の夢窓疎石による尊氏評がつとに有名である。尊氏の性格の特徴として、次の3点を掲げている。

第1に、心が強く、敵を見ても恐れることを知らない。尊氏は、幾多の合戦で命を失う危機に遭遇しているが、そんな時であっても笑みを含んでいたという。九州の多々良浜の合戦では、敵の圧倒的優勢を見て、潔く腹を切ってしまうおうとしたが、直義に諫められ、いざ敵に向かうと、驚異的な活躍で劣勢をはねのけ勝利を収めた。潔さとともに、一旦、意を決すると、驚くほどの勇敢な行動力を発揮した。

第2に、慈悲の心が強く、人を憎むことを知らない。複雑な政治闘争に明け暮れているながら、尊氏は多くの怨敵を許している。尊氏は、湊川の合戦で自刃した楠木正成の死を惜しみ、正成の首を丁重に扱い、その子の正行のもとに送り届けたという。また、後醍醐天皇の崩御の時、尊氏はすぐさま政務を休み追悼の意を表し、等持院で法事を行い、さらに、菩提を弔うため天龍寺を造営している。敵対関係にあっても、個人を恨まない心の優しさがうかがえる。

第3に、心が広大で物惜しみしない。当時、八朔の贈物という習慣（8月1日に進物をする）があった。尊氏のもとにも数多くの贈物が届いたが、みんな人にや

ってしまうので、朝に送られた品は、夕方にはすべてなくなっていたという。お
おらかで親分肌の気性がうかがえる。

こうしてみると、勇敢で、潔く、寛大
で、優しく、物惜しみしない心、尊氏の
並外れた器量の大きさが知られる。

【参考文献】

『南北朝時代の丹波・丹後』
京都府立丹後郷土資料館／昭和 53 年

『丹波の荘園』細見末雄
名著出版／昭和 55 年

『足利氏の世界－尊氏を生んだ世界－』
栃木県立博物館／昭和 60 年

『守護領国支配機構の研究』今谷 明
法政大学出版局／昭和 61 年

『丹波史を探る』細見末雄
神戸新聞総合出版センター／昭和 63 年

『尊氏と丹波の土豪』
亀岡市文化資料館／平成 3 年

『南北朝時代の丹波・亀岡』
亀岡市文化資料館／平成 5 年

『新修亀岡市史本文編 2 巻』
亀岡市史編さん委員会／平成 16 年



(3) 古道と信仰の道をゆく

民俗芸能学会評議員

久下隆史

はじめに

「古道と信仰の道をゆく」という話は、古道というのがどの時代の道を示すのか明確ではない分、まとめやすいテーマである。とはいっても、現在私たちが利用している道は、近世の街道までさかのぼらせても、それ以前の、古代・中世の姿となると皆目見当がつかない。今回は、古道として比較的研究が進んでいる古代の官道(山陰道)と、篠山市に残る近世の源義経伝説をもとに、中世の道を推定してみたい。また、信仰の道は西国三十三所の巡礼道を示す道標が篠山市・丹波市に残っており、この観音霊場を結ぶ道を信仰の道として取り上げることにする。そのほかにも、大阪府豊能郡能勢町の妙見宮への妙見道、福知山市の元伊勢への道もあるが、それは次のテーマにしたい。

1 古代の官道(山陰道)をゆく

(1) 律令国家と道路

8世紀に入り、中央集権的な律令国家が誕生すると、全国を五畿内と七道に分け、都とその地域を結ぶ官道を設けた。丹波国は桑田郡に国の役所(国衙)を設け、現在の兵庫県域には、多紀郡と氷上郡を置き、その国と郡の役所を結ぶ道路として山陰道を建設した。この時期の官道は、大路、

中路、小路に区分されたが、山陰道は小路に位置づけられていた。

『大宝令』『厩牧令』には、「凡そ諸道に駅置くべくは、卅里毎に一駅を置け。」とあり、30里(約16km)毎に駅が置かれた。そこには「凡そ諸道に駅馬置むことは、大路に廿疋、中路に十疋、小路に五疋。」と、駅馬が常備されていた。

また、この時期の官道は平野部では、道幅6mから12mの側溝を持つ道が直線でつけられていたというから、現在の道とは大きく異なっていたようである。

(2) 山陰道と駅家

平城京の山陰道のルートは明確になっていない。平城京から直線的に長柄駅まで南北の道がつけられたとも、木津沿いに山城国に至り、そこから丹波国に入るルートであったともいう。平安京に遷都すると、京都から老ノ坂を越えて丹波国に入るようになる。山陰道は小路であるから駅馬は5疋であるが、延長5年(927)年に撰上された「延喜式」巻第28には、丹波国には、大枝、野口、小野、長柄、星角、佐治の各駅家が但馬国に向かう本路にあり、長柄駅から丹後国へ向かう支路には日出、花浪の駅家があったとある。本路の駅家には、駅馬が8疋とあり、令の規定よりも多くなっている。支路には5疋の駅馬が常備されていたとある。この

図 1 古代山陰道駅の比定地(本道のみ)

	大枝駅	野口駅	小野駅	長柄駅	星角駅	佐治駅
『和名抄』 郷名	乙訓郡大枝郷	船井郡野口郷	多紀郡	多紀郡	氷上郡	氷上郡佐治郷
吉田東伍	篠村	埴生	二之坪	郡家辺	石生	佐治
藤岡謙二郎	篠村	園部町野口	小野奥谷	篠山(郡家、野中)	石生	佐治
竹岡 林	篠町王子	園部町野口	小野奥谷	郡家	石生	佐治
奥谷高史	篠村	園部町野口	二之坪	郡家	石生	佐治
高橋美久二	大枝→篠町	園部町野口	小野奥谷	西浜谷	市辺	中佐治
岡本丈夫	大枝付近	園部町南大谷	熊野新宮付近	口坂本	水分地区	中佐治

駅馬とは別に、郡衙には伝馬 5 疋が常備されていた。

この駅家の場所が、研究者の間で論議されてきた。図 1 にその位置についての各説をあげておくので参考にしてほしい。大枝、野口、小野、佐治は大きな差異はないが、長柄と星角は場所に差異がみられる。大枝、野口は京都府なので外すとして、天引峠を越えた山陰道は、現在の篠山市小野奥谷辺りの小野駅に至る(写真 1)。次の長柄は、現在の国道 372 号線を直線で伸ばすと、野間付近に出ることから、この辺りに比定する説もある。しかし、古代の官道は、政治、経済、軍事の幹線道路としての役割を持っていたことから、国衙や郡衙を無視するとは考えられない。多紀郡の郡衙は、「郡」の刻印を持つ須恵器が発見された、東浜谷遺跡付近と考えられている。この東浜谷遺跡の近くに、「長丙」という墨書を持つ須恵器 3 点と井戸、建築物を伴う西浜谷小西ノ坪遺跡があり、この近くには「長柄芦」という地名があることから、この辺りを長柄駅と考えることが妥当ではないかと思う。そうすると、小野駅から篠山川を越



写真 1 延喜式小野駅址碑

える位置が問題になる。可能性とすれば、八上新(日置)、八上上、八上下の 3 地点付近から北上し、沢田付近の平地を西に向かうのではないかと推測される。この渡河の場所は、多紀郡を東西に二分した西県、東県の境界とも関係し、今後の大きな課題になろう。

長柄駅からは、鐘ヶ坂を越えて氷上郡に出る。直線道路と考えると、星角駅の位置は、瓦片 4 点と奈良時代前半の須恵器、門跡らしい疎石の出土した柏原藩陣屋跡下層遺跡をあてることもできる。石生付近から駅家を示す遺跡も遺物も出土しておらず、駅家の建物が門を持つ瓦葺の建物であるだけに、その可能性がある。

氷上郡の郡衙の場所は、明確ではない

が旧氷上町市辺で発見された、市辺遺跡付近ではないかという説がある。山陰道は市辺付近から佐治方面に直進し、中佐治辺りの佐治駅を経て遠坂峠(写真2)を越えて但馬国に出たのである。その道路の遺構は、東西の限られた谷筋ではあるが、まだ発見されていない。篠山市域、丹波市域ともに、道路遺構や駅家遺構、遺物は何も発見されていないのである。古代の官道、山陰道は両市ともに幻の道路といえる。



写真2 遠坂峠付近

372号線沿いに、和泉剛山、上宿弁慶塚、真南条龍蔵寺焼失、真南条鞍掛山、小野原義経休憩の民家を伝説の地としてあげている。

古市から今田にかけては、国道沿いとは別に、住山集坂(写真3)、小野原偽首をあげている。この道は、住山の八幡神社付近の集から山中を小野原、四斗谷、黒石に抜ける道であり、黒石側には道標も見られる。おそらく、中近世に利用された古道であろう。



写真3 住山集付近

2 義経伝説と古道

幻の道、古代山陰道は、中世には現在の国道9号線沿いになるといわれている。しかし、古代の山陰道は姿を変えつつ、中世にも利用されたようである。次に、中世の道を、篠山市に残る近世初頭の源義経の伝説地をもとに復元してみたい。

源義経が、丹波に入り播磨国の三草山に陣を構えた平資盛、有盛軍を破るのは元暦元年(1184)2月4日・5日のことである。2日の道を1日で、走り抜け、その夜の内に平家軍を破っている。

義経が多紀郡を駆け抜けたのはわずか1日のことであるが、貞享4年(1687)の篠山藩領の地誌『篠山領地誌』には、国道

こうした、義経が利用した道路とは別に、篠山市街地の北部、大熊の笛吹山と太鼓谷、鷲尾の十郎良久社堂、浜谷観音堂にも義経伝説が見られる。この伝説の地を結ぶ古道が、古代の山陰道を継ぐ道ではなかろうか。

さらに、野中付近から槇峰の北部を通る山沿いの道にも、義経伝説が見られる。大沢槇峰天台伽藍の焼失、大沢千首塚などがそれである。この道も、中世に広く利用され、近世に引き継がれる道の一つであろう。

こうした、伝説の地は正徳6年(1716)の、『篠山封疆志』にもそのまま引き継がれている。ところが、村から記録を提出させてまとめた明和8年(1771)頃の『丹

波志』では、新たな伝説として、不来坂嶺、不来坂の無名木、四斗谷・黒石間の会嶺、市原から上鴨川に越える只越を追加している。この追加された伝説は、国道372号線沿いと、その北部山中をつなぐ道に関係し、新たな道を紹介したものではない。ただ、只越峠(写真4)は市原から比較的容易に加東市上鴨川に越える道で、これが新たな道の追加といえる。



写真4 只越峠

こうした伝説の全てが古道の場所を示すわけではないが、義経のように京都から三草山に兵を進めた場合は、中世以来の古道に伝説を残し、現在の私たちに古道を推定させる資料を提供してくれるのである。

3 西国三十三所巡礼道と道標

三十三所観音霊場の巡礼は、平安末から始まるが、この頃は僧侶の修行としての巡礼であり札所も現在とは異なっていた。現在のように、和歌山県の青岸渡寺から岐阜県の華巖寺にいたる札所の設定は、室町中期といわれ、このころから、民衆の札所巡りが始まる。

そもそも、札所の数を三十三としたのは、観音菩薩が三十三身に応化して私たちを救うという信仰に根ざしている。こ

の観音巡礼は、江戸中期以降に庶民の間に流行する。

兵庫県の札所三寺院は、通常の本道を利用すると、第24番中山寺から、25番清水寺、26番一乗寺、27番播円教寺の順番に札所を打って行くのだが、東国からの巡礼は中山寺から西国街道を利用して、須磨、明石、高砂などの観光旅行をして円教寺に参拝するコースをとった。このコースだと、円教寺、一乗寺、清水寺の逆に打つことになる。こうしたコースを逆打ち道とよんでいた。この逆打ち道を利用した巡礼が丹波の道を歩いたのである。

清水寺から丹波坂を下りて篠山市今田町市原に出ると、只越峠との分岐に清水寺と社を示す地蔵と角柱の道標がある(写真5)。ここから、道標調査のまとめがない旧篠山町を除いて、札所寺院、巡礼と関係する道標の位置を村名で示すと、今田新田、下小野原、上小野原、古市、波賀野、南矢代、犬飼、味間新、味間南、西古佐、大山下、北野、北野新田、町之田、大山新、追入と巡礼道に沿って残っている。



写真5 丹波坂の道標

この追入への道とは別に、佐中峠を越えて丹波市東中に出る、宮田、上板井、小坂にも巡礼関係の道標が見られる。追入からは、瓶割峠を越えて国領に入り、巡礼橋を経て、野上野、多利、小多利、棚原、大野、大森、寺内、才田、梶原、上田を経て塩津峠に至るルートが巡礼道であった。

道標の建立年代は、篠山市は18世紀のものが3基のほか、10基が19世紀のものである。丹波市では、小多利に「左ハじゅんれいみち」とある元禄元年(1688)のものがある。巡礼関係の道標としては、丹波でこの道標が一番古い。そのほか、18世紀のものが2基、19世紀が5基見られる。丹波市の特色は「成相十一里谷汲七十三里」と示す、明治18年(1885)の道標とともに、巡礼道、西国道などの街道名をのせていることである。

建立者は、篠山市にも見られるが、観音講中や念仏講中、女講中などによる建立も見られる。道標の建立が善根とされたことがよく分かる。そういえば、丹波坂の登り口に位置する市原では、巡礼にお接待をしていた家の伝承をきいたことがある。

旧山南町阿草や谷川に清水寺を案内する道標があるが、谷川から阿草を経た大阪道を通る巡礼もあったためであろう。

以上、丹波の古道を紹介したが、道を単に人を運ぶものとして見れば、あまりにも表面的な理解に過ぎよう。道を歩く人たちは、他国の文化を運び、新しい文化を伝えるとともに、外の世界に対する夢を育ててきたのである。歴史の道は、現在の我々が考える以上に大きな役割を果たしていたのである。

【参考文献】

- 兵庫県教育委員会編『歴史の道調査報告書 山陰道』
兵庫県教育委員会 1993
- 吉田東伍『大日本地名辞書』
富山房 1907
- 藤岡謙二郎『都市と交通路の歴史地理学的研究』
大明堂 1960
- 藤岡謙二郎編『古代日本の交通路』3
大明堂 1978
- 奥谷高史『丹波の古道』綜芸社 1980
- 丹南町史編纂委員会編『丹南町史』上巻
丹南町 1994
- 小野市立好古館編『義経の伝説』
小野市立好古館 1994
- 梶村文弥『源義経』あいわ書房 2001
- 森沢義信『西国三十三所道中案内地図』
下 ナカニシヤ出版 2010
- 森沢義信『西国三十三所道中の今と昔』
下 ナカニシヤ出版 2010



(4) 丹波に延びる鉄路

南丹市立文化博物館学芸員

井尻 智道

はじめに

日本の鉄道は、国家の近代化や戦後復興など社会の成長と期を同じく発展してきた。本講座では、日本へ鉄道導入される段階から、鉄道建設、そして丹波地方への鉄道敷設について、京都鉄道と阪鶴鉄道を舞鶴への鉄路をめぐる争いを中心に紹介する。

1 鉄道の夜明け

明治5年(1872)9月12日(旧暦・現在は10月14日)午前10時、「横浜」に向けてわが国最初の蒸気機関車が走り始めた瞬間である。この路線は、たった29kmだったが、その後わずか100年で、世界に誇る総延長約2万kmの鉄道網を築くことになった。

日本にはじめて蒸気機関車がもたらされたのは、ロシアのプチャーチン(嘉永6年<1853>)、アメリカのペリー(嘉永7年)が、開国の要求をもって来航した時のことである。いずれも蒸気機関車の模型を持参しており、ペリーの場合は徳川将軍に献上している。

まず、ロシアのプチャーチンが長崎に来航した時、蒸気機関車の鉄道模型を船上で走らせた。この模型を見た佐賀藩の「佐賀藩精錬方」は、安政2年(1855)、

全長27cmのアルコール燃料で動く模型の機関車を完成させた。模型とはいえ、日本人がはじめて作った機関車であった。次に、アメリカのペリーが幕府に献上した蒸気機関車は、人を乗せて走ることができるほどの大きさがあり、日本の役人河田八之助を屋根に乗せて時速約20マイル(32km)のスピードで走ったと記録されている。なお、乗車した本人の感想は、「極めて快適であったと述べている」が、それを見ていた外国人は「日本人は震えながら機関車にしがみついていた」と伝えている。

鉄道建設の早期実現は文明開化や近代化のシンボルとして、官民一体となった大プロジェクトである様に思えるが、実際は今日では想像も付かない、挫折と困難の連続であった。その中心で活躍したのが明治政府大蔵民部省に勤める、伊藤博文(長州藩出身)と大隈重信(肥州藩出身)の2人官僚であった。

二人が東京ー京都間をはじめ全国に鉄道を造ろうとしたが、鉄道建設計画は国民や政府内部から猛烈な反対を受けることになる。借金だらけの財政で鉄道建設などに使っている余裕は無いし、鉄道建設に使うぐらいなら、迫り来る列強に対する軍備に予算を回したかったのである。また、鉄道は鉄の塊が煙を出して走るわ

けだから、鉄道をよく知らない人からは異国の魔術として忌み嫌われていた。二人は反対派から暗殺の危険もあったとう。

しかし、結局は鉄道建設の大反対勢力を強引に押し切り、明治2年(1869)11月20日廟議により我国初の鉄道建築が決定され、明治5年9月、新橋―横浜間の開通につながる。

一方、関西では、明治7年(1874)5月11日、大阪―神戸間営業開始したことを皮切りに、順次路線をのぼし、明治10年2月、神戸駅から京都駅まで全線が開通したことを記念して明治天皇を迎えて鉄道開通式が行われた。

2 丹波地方における鉄道敷設の機運

明治20年代に入ると、全国各地に私設鉄道のブームが巻き起こる。近畿地方も同様にブームが起こり、新興資本も大きな影響を受けることになる。これには二つの大きな要因があり、一つは明治20年(1887)年5月「私設鉄道条例」が公布され、各地の資本家が鉄道会社を設立して雨後の竹の子のごとく多数の会社が誕生した。もう一つは、明治22年5月に舞鶴に第4海軍区鎮守府設置(明治34年開庁)が決まったことであった。これにより舞鶴を目指す鉄道計画が続出することになる。丹波地方においては、6社の鉄道敷設計画が出願される。しかし、当時の鉄道長官井上勝は、いずれの計画も必要性を認めながら不完全であるとして却下してしまう。【表1】

3 第一期予定線を目指す ～京鶴線 VS 土鶴線～

明治24年(1891)帝国議会で鉄道問題が議論されはじめると、舞鶴への鉄道布設に対する地元舞鶴町・沿線住民・政財界の機運が高まりをみせる。明治25年6月、政府が公布した「鉄道敷設法」に、京鶴線(京都―舞鶴間)、土鶴線(土山―舞鶴間)は比較線という形で第1期建設予定とされた。このため鉄道誘致運動はさらに高揚することになる。

京鶴線は、京都・嵯峨・亀岡・鳥羽・殿田・本庄・山家・綾部・上杉・舞鶴の路線を計画し、京都商業会議所が中心となって、京都・舞鶴の有力者により推進された。主に、軍事・経済・交通運輸上、土鶴線より有効な路線であると主張した。

一方、土鶴線は、土山から加古川を北上し谷川・福知山・綾部・舞鶴の路線を計画し、神戸商業会議所が中心として兵庫・天田郡の有力者が誘致を図った。そして、京鶴線に比べて距離的に差があっても、地形的に平地であり、鉄道敷設上抵抗の少ないコースであると主張を展開した。その結果、明治26年2月、鉄道会議は、京鶴線を採択することになる。その理由としては3つがあげられる①軍部の影響(縦貫鉄道を望む)②路線方向が京阪地区にあること③東京との連絡が近いことである。この鉄道会議の議決を受けて、明治26年2月、第4回帝国議会に提出され、一度は議決されるも、調査不十分として第5回帝国議会まで議事延期されたが、事業の成立には至らなかった。

京鶴・土鶴の争いは鉄道敷設法の予定線・比較線を巡る争いであったが、京阪神の運動が基盤となり、私設鉄道敷設勢力に移り、舞鶴港を目指す私鉄の計画が

各地から起こる原因となった。

4 舞鶴への道、再び

明治26年(1893)3月、軍部や私鉄企業家と対立していた鉄道官設論者、井上長官が退任すると私鉄熱は高揚する。加えて、明治26年、経済界が回復に向かうと、舞鶴への鉄道熱が再燃。「京都鉄道」「阪鶴鉄道」「摂丹鉄道(同名2社)」4つの計画が出願された。【表2】

明治27年5月、これら4社に対する審議が鉄道会議で行われた。鉄道会議とは、「鉄道敷設法」(M25.6.21)に規定されている、鉄道(関係)大臣の行政執行上の最高顧問機関。鉄道建設順序や私設鉄道の免許付与など、鉄道に関する政府の諮問に答える。議員は、内閣各省の高官・陸海軍・鉄道関係技術者・学識者など20数名からなっており、この会議の答申については、決定的なものではないが、政府や議会において尊重され鉄道建設の方向づけの基礎となった。特に、軍部の発言力は強く、鉄道は軍事物資・機材を確保する上で必要不可欠の戦力として位置付けられていた。

鉄道会議の結果、明治27年7月、「京都鉄道」「阪鶴鉄道」が仮免許を得ることとなる。「京都鉄道」は京都を基点とし、亀岡、園部、舞鶴を経て宮津に至る線、綾部から分岐して福知山を経て、和田山に至る線、さらには、政府が追加した舞鶴から分岐して余部に至る線を含めた路線。「阪鶴鉄道」は神崎(現尼崎)～福知山間。「摂丹」の両鉄道は「京鶴」「阪鶴」鉄道と路線が重なる箇所があるため却下された。【図1】

5 京都鉄道・阪鶴鉄道路線敷設と営業成績

京都鉄道・阪鶴鉄道それぞれの免許下付から路線開通までを見て行くことにする。

まず、京都鉄道について、明治28年(1895)11月に本免許を受けた。日清戦争の影響もあり工事着工が遅れたが、明治29年4月、鉄道敷設工事に着手する。明治30年2月、二条一嵯峨間6.1kmが開通する。京都鉄道は、官線への進入信号が不備のため京都駅への発着列車本数を制限されていた。このため、大宮駅を仮設駅として設置し、明治30年4月、大宮―二条間3.3kmが開通する。明治30年11月、京都―大宮間764.4mが開通。そして、明治32年8月15日、京都―園部間35.2kmが開通することになる。ただ、嵯峨―亀岡間の約4.8kmが保津川に沿った峻険な経路をとったため、難工事となり、京都鉄道の経営を圧迫する一因となった。

次に阪鶴鉄道についてであるが、明治26年に京鶴線の比較線とされた土山から舞鶴までの間の鉄道(土鶴線)の実現の可能性が低いと判断され、大阪府及び兵庫県の実業家が再検討し、大阪から舞鶴へ別路線として計画したものである。

まず、尼ヶ崎(のちの尼崎港)―池田(現在の川西池田)間で営業していた摂津鉄道を譲り受ける形で、日本海側の主要都市の一つであった舞鶴と大阪を結ぶ鉄道が計画された。これが、明治26年8月、大阪―神崎―池田―三田―福知山―舞鶴間の鉄道敷設出願へとつながる。同

年12月には、福知山－和田山－八鹿間の支線敷設も出願するが、同じく舞鶴への鉄道敷設を競っていた京都鉄道に京都－綾部－舞鶴間の認可が下りたため、阪鶴鉄道には福知山－舞鶴間の認可は下りなかった。また、神崎（現JR尼崎）－大阪間も、官線鉄道と並行しているという理由で認可が下りなかった。その結果、認可を得たのは神崎－福知山間にとどまり、阪鶴鉄道にとっては不本意なものであった。

敷設までの流れをみていくと、明治29年4月30日、阪鶴鉄道に免許が下りる。同年7月には、建築事務所を伊丹・三田・篠山・福知山に置くが、8月の暴風雨により福知山から柏原に、篠山から古市へ移された。篠山の事務所については、篠山人力車組合などの反対によるもので線路も篠山を経由しないことが決まった。明治30年4月、伊丹停車場にて起工式を行い、まず、池田－宝塚間が同年12月に開通する。同じ頃、神崎－池田間の改築工事が終了し、明治31年6月には、神崎にて官設鉄道と連絡、宝塚－有馬口（生瀬）間も開通した。その後、有馬口－三田間（明治32年1月）、三田－篠山間（明治32年3月）、篠山口－柏原間（明治32年5月）が順調に開通した。そして、明治32年7月、柏原－福知山（福知山南口）間が開通することにより、神崎から福知山まで全通することになった。

6 国有鉄道へ

阪鶴鉄道は、明治32年（1899）7月、大阪－福知山間を開通させたが、この路線が接続するはずの京都鉄道は建設が難

航し、福知山－舞鶴間が開通しない状況が続いた。このため、阪鶴鉄道は明治33年12月、阪鶴鉄道が福知山－舞鶴及び宮津への延長を申請したが、明治34年7月に却下。明治35年1月、再度申請するも4月には再び却下された。

延長申請を却下された阪鶴鉄道は、水運の盛んな由良川に着目し、この水路を利用して舟運を計画した。これが明治34年12月新設された「由良汽船商会」である。汽船は、蛇ガ端・由良間を航行して客貨を輸送し、福知山南口駅・蛇ガ端間には馬車鉄道が敷設され貨物運搬が行われた。舞鶴までの道を約3時間で結んだという。

一方、京都鉄道は、明治32年8月に、京都－園部間を開通させたが、京都－嵯峨間の土地買収や嵯峨－園部間の建設費用に相当な資金を投入したため資金繰りがつかなくなり、園部以西（綾部・福知山・舞鶴方面）への建築資金を得ることができずにいた。政府に対して何度か補助金の交付を願い出たが、日清戦争による恐慌や鉄道官設論が台頭するなか、願いは聞き入れられなかった。そこでやむなく明治33年11月、園部以西の免許取消を出願する。そして、明治33年12月、「未成線路線中、園部－綾部間、綾部－舞鶴間、舞鶴－餘部間、綾部福知山間を同時に着手し、速成すること。未成部分に要した費用を補償し、用地、材料と既成部分すべてを政府が買い上げること。」と申し出る。

しかし、未成路線速成について、京都鉄道と政府の考え方に決定的な相違があった。京都鉄道は園部以西の全線の速成

を主張していたのに対し、政府は、財政上の理由から、阪鶴鉄道の路線である福知山－舞鶴間の速成に重点を置くと考えていた。これに対して、京都鉄道はどうしても認めることができず、京都財界のメンバーが中心となり速成運動が激化する。

結局、政府との折り合いがつかず、京都鉄道は、明治34年3月、未成線の竣工期限を3年間延長するよう申し出た。同年6月、許可を受けるが、「工事延長期間内に政府が必要または、京都鉄道がこれに応じなかった場合免許を取り消し、未成線を買収することができる」という条件がつけられていた。その後、京都鉄道の推進母体であった京都商業会議所からは、明治35年、2度にわたり「京都鉄道急設ニ関スル建議」を政府に提出したが、聞き入れられることはなかった。

そうしているうちに、日本とロシアの関係が険悪化し、戦争は避けられない状況に陥り、軍事的必要から舞鶴港へ向けての鉄道敷設が早期に求められるようになり、明治35年3月、未成部分政府にて

建設を決定される。同年4月、逓信大臣は、京都鉄道に免許取消を通達。明治36年5月、福知山－舞鶴間鉄道起工。明治37年11月、福知山－舞鶴間の鉄道が開通し、舞鶴－大阪間が全通することになった。官設された、福知山－舞鶴間については、国有化までの期間、阪鶴鉄道が国から貸与する形で運行がはじまった。

園部以西の鉄道敷設に目を向けると、明治39年(1906)10月、綾部－園部間起工され、明治43年8月、園部－綾部間が開通することになる。この間、明治40年8月には、「鉄道国有法」により京都鉄道・阪鶴鉄道は双方とも買収され、財産等は鉄道院へ引き継がれてしまうが、明治43年8月、園部－綾部間の開通は、明治37年に通じていた福知山－綾部間とつながることにより、京都－舞鶴間は起工以来14年ぶりに全通することになった。【図2】

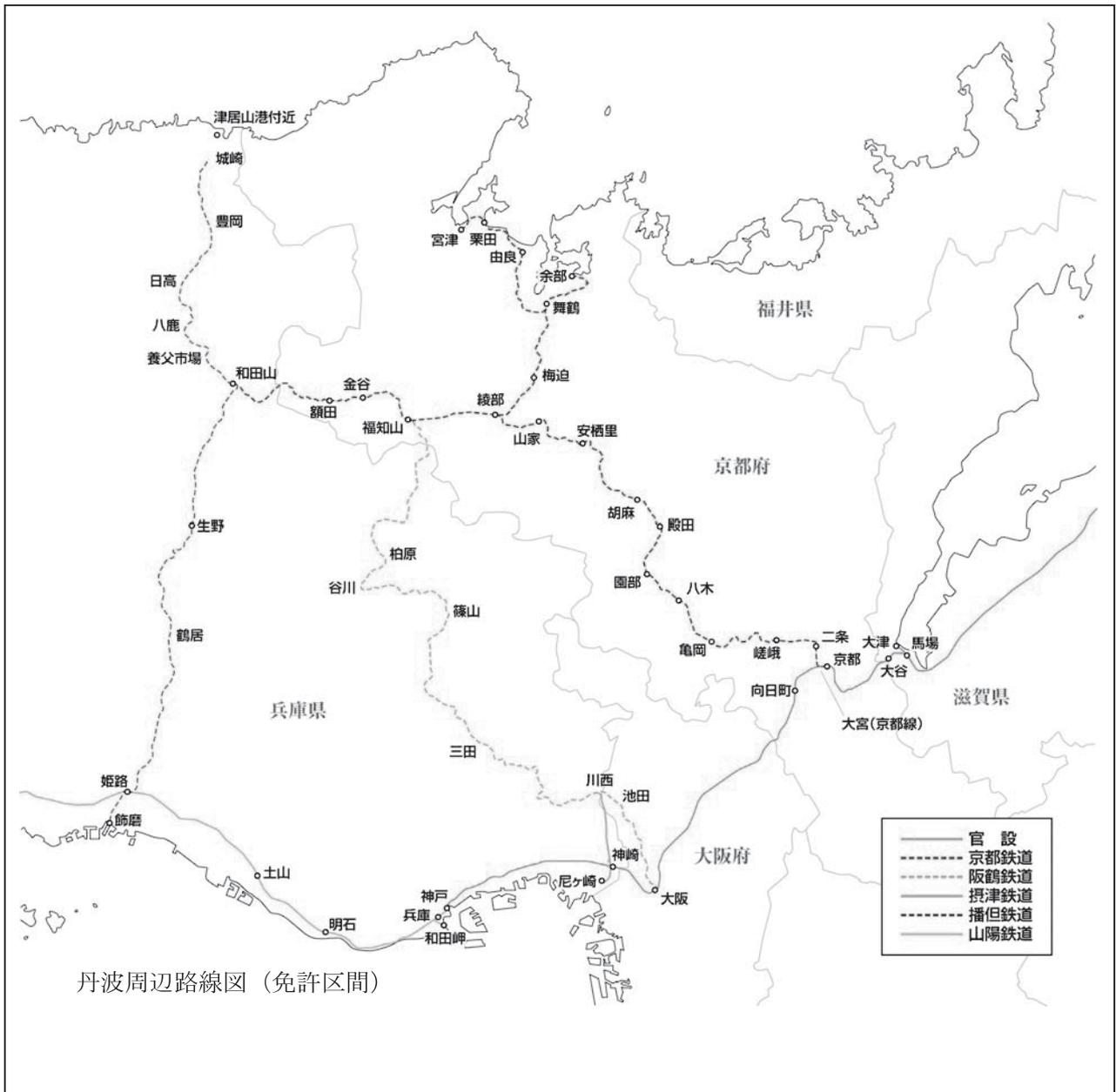
【表1】 ■ 6社の一覧

鉄道名	出願者	経路
播丹鉄道	藤田高之	飾磨・生野・福知山・舞鶴
舞鶴鉄道	土居通夫	大阪・池田・園部・舞鶴
摂丹鉄道	小西壮二郎	神崎・福知山・舞鶴。※後に、山陰鉄道と改称、経路も松江まで延長申請
舞鶴鉄道	磯野小右衛門	大阪・池田・綾部・舞鶴
京鶴鉄道	市田理八	京都・亀岡・園部・舞鶴
南北鉄道	土居源三郎	加古川・加東・多可・氷上・天田・舞鶴

【表2】 ■ 4社の一覧

出願年月日	出願発起人・路線の特徴等
京都鉄道 明治 26 年 7 月 14 日 出願	<p>【発起人】小室信夫ほか 115 名</p> <p>【路線】官設京都駅を起点に亀岡・園部・舞鶴を経て宮津に至り、また綾部より分岐して福知山を経て和田山に至る路線と、舞鶴より分岐して餘部に至る。</p> <p>【特徴】水系コースをとる。京都からは大堰川を上り胡麻の分水嶺から由良川上流に出て、綾部に至り、分岐して伊佐津川沿いに舞鶴に至る経路</p>
阪鶴鉄道 明治 26 年 8 月 1 日出願	<p>【発起人】住友吉左衛門ほか 56 名</p> <p>【路線】大阪府西成郡曾根崎村・兵庫県三田町・篠山・柏原町・福知山町・綾部町・舞鶴に至る。</p> <p>【特徴】武庫川沿いに北上し三丹地区の中央を貫き、福知山を中心とする人口稠密地区を通過する経路</p>
摂丹鉄道 明治 26 年 6 月 17 日 出願 （追願：同年 8 月 14 日）	<p>【発起人】弘世助三郎ほか 19 名（追願者岡橋治助ほか 5 名）</p> <p>【路線】官設の京都・舞鶴間が出来ることを前提に計画されたもの。大阪府梅田・池田村・兵庫県多田院村・大阪府東郷村・京都府宮前村・園部町・船岡村の経路</p> <p>【特徴】官線京鶴鉄道が変更又は廃止され、当該鉄道の許可が得られない時は甲号を、甲号も不許可の場合は乙号を追願</p> <p>甲：大阪府梅田・池田村・兵庫県多田院村・大阪府東郷村・京都府宮前村・園部村・須知村・綾部町・舞鶴港</p> <p>乙：大阪府梅田・池田村・兵庫県多田院村・多紀郡後川村・日置村・京都府梅田村・兔原村・綾部町・舞鶴港</p>
摂丹鉄道 明治 26 年出願	<p>【発起人】小西新右衛門ほか 20 名</p> <p>【路線】川辺郡小戸村・園部、有馬郡生瀬・三田</p> <p>【特徴】摂津鉄道を延長する計画、※前記の摂丹鉄道とは同名異社</p>

【図1】





(5) 丹波再発見総括シンポジウム

(パネリスト)

京都府立大学生命環境学部教授 宗田好史

民俗芸能学会評議員 久下隆史

京都大学東南アジア研究所准教授 安藤和雄

京都造形芸術大学環境デザイン学科准教授 下村泰史

大阪商業大学経済学部准教授 原田禎夫

(コーディネーター)

亀岡市文化資料館長 黒川孝宏

発言内容 (要約)

○宗田 好史 氏

亀岡市の景観まちづくり計画について

- ・景観計画は、亀岡市全域を対象にしている。農村地帯もある。
- ・景観計画の考えは、都市部からでた。町並み・町屋を守るため、行政も力を入れるし、住民も協力する。亀岡の誇りを守っていかう。
- ・町並みが残っていないところでも、デザインガイドラインをつくり、歴史的景観を形成していく。

○久下 隆史 氏 <配付資料より>
講座「丹波学」と丹波の森づくり

1 丹波地域の地域創造の指針 (丹波の森構想)

- (1) 丹波の森宣言 (昭和 63 年 9 月) 丹波地域の 21, 616 世帯の同意署名を得て採択
- (2) 丹波の森構想 (平成元年)

- ①丹波地域を「丹波の森」と位置づける。
- ②地域の特性や資源を生かす。
- ③人と自然と文化、産業の調和した地域づくりを住民、事業者、行政が一体となって推進する。

2 丹波の森公苑の役割

- (1) 丹波の森公苑 (平成 8 年 4 月オープン)
- (2) 丹波の森構想の推進拠点
- (3) 生活創造センター

3 講座「丹波学」の創設

(1) 県下の地域学

ひょうご学研究所、神戸学研究会、播磨学研究所、但馬学研究会、淡路島デザイン会議、講座「丹波学」

(2) 講座「丹波学」の開講 (平成 8 年度)

- ①兵庫県丹波地区の広域歴史文化組織
- ②丹波の森大学 (自然科学中心)
- ③丹波の森構想に根ざす人文分野の地域づくり講座の必要性から講座「丹波学」が誕生する。

4 講座「丹波学」の視点

(1) 丹波学の基調(丹波の森宣言)

「丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。」

(2) 地域創造を目指す生涯学習の講座

(3) 地域を客観化する視点とお国自慢の排除

5 講座「丹波学」の歩み

(1) 第一期 村の生活の見直しと活用策

①平成8年度 丹波の住まいを考える

～過去から未来へ～

②平成9年度 未来に伝える丹波の民俗

文化(食、年中行事、祭礼、人の一生)

③平成10年度 丹波の民俗芸能を知ろう

(京都府丹波、兵庫県丹波、活用策)

(2) 第二期 文化遺産の確認と活用策

④平成11年度 文化遺産を活用した地域づくりを考える(史跡)

⑤平成12年度 丹波に残る絵画と古文書・典籍を活用した地域づくりを考える

(3) 第三期(再確認期)

地域学の役割と広域的な視点の必要性

⑥平成13年度 未来に伝えたい丹波

～丹波を学ぶ人のために～

(4) 第四期 テーマ別特論の時期、現地学習の導入

⑦平成14年度 俳人の世界から見た丹波(丹波を歩く柏原編)

⑧平成15年度 城から見た丹波の森(丹波を歩く春日編)

⑨平成16年度 方言からみた丹波(丹波を歩く青垣編)

⑩平成17年度 古代から見た丹波(丹波を歩く篠山編)

⑪平成18年度 伝統の技からみた丹波(丹波を歩く今田編)

⑫平成19年度 地下からのメッセージ～丹波竜にたくす夢～(丹波を歩く篠山市・丹波市)

⑬平成20年度 もう一度学びたい丹波の城～秘められた城主・人物伝～(丹波の城を巡る

～篠山城跡と八上城跡から～)

⑭平成21年度 続・丹波の城

～篠山築城400年～

(丹波の城をめぐる

～篠山城跡と採石場～)

⑮平成22年度 『道』から見た丹波の歴史～京都丹波とともに学ぶ～

(丹波再発見総括シンポジウム)

6 今後の課題

(1) 京都府丹波との交流

第1回、第3回、第5回、第6回
第15回

(2) 地域学は地域づくりの基礎材料を地域づくりへの活用策に活用できているか。

(3) 篠山市・丹波市の公民館活動との連携 講座「篠山学」、講座「丹波氷上学」

(4) 学校教育と地域学の連携策

7 よりよき地域の創造について

(1) 地域づくりは奇抜なアイデアではなく地味な仕事である。(過去と未来に責任を持たねばならない)

(2) 文化は一過性のものではなく積み重ね。(良くも悪くも市民がする。)

(3) 料理は材料と調味料と道具と人の腕がものをいう。(文化や歴史も同じである。)

○安藤 和雄 氏

「グローバル」な視点での地域学、地域づくり～諸外国における農村の現状～

世界の中で日本の農業が果たすべき役割

- ・ 確実な未来が描けない過疎化の問題
- ・ 日本の農村・農業の問題は、アジア諸国が追随している。
- ・ 農村は「都市のような生活をするのがよいことだ。」という経済合理性を離れ、持続的発展の視点から考える必要がある。
- ・ 亀岡モデルの発信。

(今の日本の抱える問題は、次のアジアの問題である。)

亀岡には、いろいろな工夫がある。自分たちの問題は狭い日本の中で考えるのではなく、世界の問題だという考えがある。

- ・ 主体的に地域の人たちが考える地域づくりが大切である。
- ・ 今こそ真の農村の開国と世界の在地に生きる人との連帯を

○下村 泰史 氏

「天若湖アートプロジェクト」とその地域性

1 「天若湖アートプロジェクト」とは

- ・ 「あかりがつなぐ記憶」といい日吉ダムの湖面に灯を浮かせ水没した集落を一夜かぎり再現する仮設空間アートのこと。
- ・ アート NPO と流域団体のコラボレーションからはじまった。
- ・ 流域のさまざまな人々の協力で初めて実現するアートである。

2 桂川流域ネットワークとその広がり

- ・ 天若湖アートプロジェクト 2005
- ・ 保津川筏復活プロジェクト

3 「天若湖アートプロジェクト」が目指す

もの

- ・ 流域の市民とその地域とを結ぶ。
- ・ 湖面を生かす。

○原田 禎夫 氏

ソーシャル・キャピタルへの投資 ～つながる地域の創造～

ソーシャル・キャピタルとは、人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴。

(R. Putnum1993)

1 ソーシャル・キャピタルへの投資

- ・ 同業者組合や商工組織、地縁団体などの既存団体のような「結束型」SCが蓄積されている。このことをふまえて、そのパフォーマンスを向上させるような政策を考えることが重要である。しかし、個々の組織を結ぶ「橋渡し型」SCはそのままでは形成されにくく、政策的な新たな取り組みが重要である。

- ・ ソーシャル・キャピタルへの政策的投資として「連携支援」が重要。

2 筏がつなぐ“山”、“川”そして“まち”
保津川筏復活プロジェクトのこれまでとこれから

- ・ 「流域の伝統文化の再発見」と「河川環境の保全」という2つの目的
- ・ 市民、企業、行政、学校、NPO など多様な主体の連携
- ・ 外部資金の獲得と、外部からの評価
- ・ 「筏」という、古くて新しいビジネスの創出へ



(6) 京都丹波の史跡巡り

亀岡市文化資料館館長

黒川 孝宏

穴太寺(あなおい)

～西国三十三箇所 第21番札所～

西国三十三箇所観音巡礼の21番札所。身代わり観音の説話が有名。本堂は京都府指定文化財。各種指定文化財が数多くある。

穴太寺見学風景



篠村八幡宮

同宮で足利高（尊）氏が源氏再興と北条氏打倒のため挙兵し、「旗立て楊」に源氏の白旗を掲げた。

尊氏や集まった諸将が矢を奉納したという「矢塚」が残っている。

* 篠村八幡宮見学風景 *

矢塚・・・高氏が、戦勝祈願の願文を捧げる際に、鏑矢を奉納。家臣たちも上矢を奉獻、矢が塚のように高く積み上げられたという。

旗立て楊・・・高氏は、全国の武将に参陣を促すと、本營の所在を明らかにするべく、この楊の木に、足利家の家紋の「二引両」の大白旗を掲げたという。



3 講師プロフィール

第1回 横川 淳一郎 郷土史家

専門分野 郷土史

所属学会 伊能忠敬研究会

著書 「伊能忠敬 丹波（兵庫）を歩く」

第2回 黒川 孝宏 亀岡市文化資料館館長

専門分野 中世・近世史

展示会 「石田梅岩」、「円山応挙」、「明智光秀と丹波・亀岡」
「南北朝時代の丹波・亀岡」、「探求！丹波亀岡城」

第3回 久下 隆史 民俗芸能学会評議員

専門分野 日本民俗学、日本芸能史

所属学会 民俗芸能学会

著書 「ひょうごの民俗芸能」（神戸新聞総合出版センター）
「都道府県別祭礼行事 兵庫県」（おうふう）
「近畿の民間療法」（明玄書房）
「近畿地方の住い習俗」（明玄書房）
「祖先祭祀の歴史と民俗」（弘文堂）

第4回 井尻 智道 南丹市立文化博物館学芸員

専門分野 民俗分野

展示会 「映像文化の足跡」、「妖怪大集合！！」、「なんたんの味」

第5回 丹波再発見総括シンポジウム

<パネリスト>

宗田好史（京都府立大学生命環境学部教授）

1956年浜松市生まれ。法政大学工学部建築学科卒業。

同大学院を経て、イタリアのピサ大学、ローマ大学大学院で都市・地域計画学を専攻し、歴史的都市保存計画、景観計画を研究。国際記念物遺産会議理事、東京文化財研究所客員研究員、国立民族学博物館共同研究員などを歴任。

久下隆史（民俗芸能学会評議員）

兵庫県教育委員会事務局社会教育・文化財課主幹兼施設係長。兵庫県立但馬文政府長兼県立但馬生活科学センター所長。県立宝塚北高等学校校長、兵庫県教育委員会阪神北教育事務所、県立北摂三田高等学校校長を歴任。

安藤和雄（京都大学東南アジア研究所准教授）

1954年愛知県生まれ。静岡大学農学部卒業。京都大学大学院農学研究科熱帯農学専攻院生および国際協力事業団長期派遣専門家として、バングラデシュ農村開発プロジェクトに参加。現在、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室准教授として、農村開発に関する実践研究に従事する。

下村泰史（京都造形芸術大学環境デザイン学科准教授）

1964年生まれ。東京大学農学部園芸学第二講座で緑地計画学を修める。住宅・都市整備公団で都市設計、緑地計画に従事。京都造形芸術大学で、都市デザイン、ランドスケープデザインの教育研究にあたる。桂川流域ネットワーク、天若湖アートプロジェクトなどの市民グループに関わる。

原田禎夫（大阪商業大学経済学部准教授）

同志社大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得満期退学、大阪商業大学経済学部選任講師、同准教授 現在に至る。同志社大学政策学部、京都学園大学バイオ環境学部非常勤講師。特定非営利活動法人プロジェクト保津川副代表理事。専門は公共経済学、環境経済学博士（経済学・同志社大学）

<コーディネーター>

黒川孝宏（亀岡市文化資料館館長）

1955年広島県生まれ。龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程国史学専攻を単位取得満期退学。同年から亀岡市教育委員会に勤務。

亀岡市文化資料館開館に伴い歴史分野担当の学芸員として調査、研究、展示事業に携わる。1997年亀岡市文化資料館館長に就任（現在に至る）。

4 編集後記

平成8年度の丹波の森公苑開園と同時に開設された「講座『丹波学』」は、兵庫丹波の伝統、文化、人物、言語などを総合的に考えていく「地域づくり」を目指した地域学です。

一方、京都府では、平成3年度から(財)生涯学習かめおか財団が、シンボル講座として「丹波学トーク」を実施されており、京都丹波で育まれてきた文化や先人たちの智慧を再確認し、未来に向けて問題を提起することによって、グローバルな地域学の確立を目指されています。

この2つの「丹波学」を結びつけることで、兵庫丹波と京都丹波との交流を図ることができないかと考えたのが、今年度の取り組みのスタートでした。

近世まで丹波国として一つであった兵庫丹波と京都丹波には、どちらも交通の要所として栄えてきたという共通点があります。そこで「みち」という切り口でふたつの丹波を見直すこととしました。「みち」という言葉の中に、丹波国を往来する人々が文化や物・情報など様々なものを伝える姿が浮かんでくるようで、テーマも「『みち』から見た丹波の歴史」と設定しました。

講座には、兵庫丹波と京都丹波それぞれから2名の方に講師をお願いしました。どの講座も趣向を凝らした内容で、「みち」を通して様々な角度から丹波について考えることができました。受講生の方からは「京都丹波の歴史も知ることができ、丹波地域への関心が深まった。」といった感想をいただきました。

この講義録が、私たちが暮らしている地域の歴史や文化について、もう一度見直し、兵庫丹波と京都丹波の交流を進めるきっかけとなるとともに、魅力ある丹波の地域づくりに活かされれば幸いです。

平成22年度 講座「丹波学」講義録

平成23年3月 発行

発行 (財)兵庫丹波の森協会

丹波の森公苑 文化振興部

〒669-3309

丹波市柏原町柏原5600

TEL 0795-72-5170

印刷 株式会社プリテック
